あれから10年

～施設一体型小中一貫教育学校開校までの歩み～

宮城県女川町教育委員会

はじめに

女川町は、宮城県の東、牡鹿半島基部に位置し、「三陸復興国立公園」地域に指定され、総面積が65.35㎢、人口は約6千人のまちです。風光明媚なリアス式海岸を形成し、世界三大漁場を控え、「港町女川」として繁栄してきましたが、10年前に発生した東日本大震災で町は一変しました。震災発生当時の人口は約1万人ほどでしたが、死亡者・行方不明者は827名に及び、町の中心部、離半島部は壊滅的な被害を受けました。

東日本大震災発生前の女川町

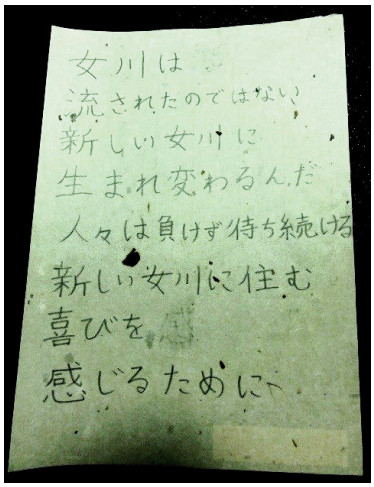
「女川は流されたのではない。新しい女川に生まれ変わるんだ。人々は待ち続ける。新しい女川に住む喜びを感じるために。」

当時の小学生が書き記した言葉に大人は奮い立ち、

「とりもどそう　笑顔あふれる女川町」

のスローガンの下、前例の全くない、千年に一度のまちづくりがスタートしました。

教育現場では、「まちづくりはひとづくり。教育百年の体系。新生女川の教育のために、前例慣習にとらわれず、子供たちを第一に、スピード感をもって。」を合い言葉に、明日の女川、明日の日本を担う子供たちの育成のための教育環境整備に取り組んできました。本稿では、その一端についてご紹介します。



1. 小・中学校の統合・再編と「女川の教育を考える会」

東日本大震災発生前、町内には小学校が5校、中学校が3校ありました。震災発生の1年前に、小学校2校が統合され、小学校は3校に、そして中学校1校も統合され中学校は2校になったばかりでした。

震災発生に伴い、離島にあった小学校1校、中学校1校は、全島避難を余儀なくされ、地区内の高等学校や町内の中学校に避難するなど、子供たち、教職員そして島民は、厳しい避難所生活が続きました。

最終的には一つの小学校施設で3つの小学校が、一つの中学校施設で2つの中学校が一緒に学校生活を送るという状況を強いられました。

震災後の女川町（2011.6.19 撮影）

このような状況を1日も早く改善しなければならないということで、町民や有識者等からなる「女川の教育を考える会」を立ち上げ、今後の女川町の小・中学校の在り方について議論を重ねました。

小・中学校の統合問題に終止符を打たれたばかりの状況で、小・中学校の統合・再編について再度議論をすることは大きなエネルギーを費やすことでしたが、「前例慣習にとらわれず、子供たちを第一に、スピード感をもって。」を合い言葉に、前に進むしかありませんでした。

「女川の教育を考える会」から、今後の町立小・中学校の在り方、方向性について、以下のような報告をいただきました。

将来の小・中学校のあるべき姿を目指し、平成25年度から、小学校1校（仮称:女川町立女川小学校）、中学校1校（仮称：女川町立女川中学校）とし、新しい小・中学校としてスタートする。

そして、中長期的な要望等も含めた7点の付帯条件も付され、その中のひとつに、9年間を見通した小・中一貫教育の段階的推進が記されておりました。

報告の「おわりに」では、次のような言葉で締めくくられておりました。

子供たちを待たせるわけにはいかない。

子供たちにツケを回してもいけない。

離島である出島の課題についても議論を重ねました。今後は、保護者、教職員、町議会議員等の皆様の理解、支援をいただきながら、スピード感をもって進めてほしいという願いも示されました。

この報告をいただいたのは、議論がスタートしてから、4ヶ月後のことでした。教育委員会会議や町議会に諮り、白熱した質疑応答等がありましたが、「統合」という文言ではなく「再編」という文言を使用することで承認をいただきました。一番心に残っているのは、「島から学校をなくさないで…」という要望でした。その要望に対する回答として、「女川の教育を考える会」のメンバーであり、島の小学校保護者でもあった方が、「断腸の思いではあるが、全ては子供たちのためです。」と話されたことが今でも頭の中から離れません。

2. 女川小・中学校移転整備事業

～町の中心(町の「へそ」)に「町の核」となる小・中学校移転～

東日本大震災発生直後、復興まちづくりの話し合いが町内各地で行われました。町長はどの会場にも足を運び説明を行いました。そして、説明の中で、まちづくりにおいて学校は中核となるものであり、町の「へそ」に小・中学校を建設することに言明しました。小・中学校再編に不安を抱えている人も多い中での発言でしたが、「女川の教育を考える会」や教育委員会としては、目指す小・中学校の未来形そのものであり、願ったり叶ったりという思いでした。

一方で、学校建設資金や住宅地の別途確保等の課題もありましたが、

「地域コミュニティの一体化」

明日の女川を担う子供たちのことを第一に考える。様々な困難に対応できる「社会を生き抜く力」を身に付けることができる学校とする。

「小・中学校住宅地からの徒歩圏の拡大」

障害がある子も障害がない子も、みんなが安心して学校生活を送ることができる学校とする。保護者が安心して子供たちを通わせることができる、これまで以上に安全な学校とする。

「町の中心部における防災拠点の確保」

小中一貫教育の強みが出せる「おらほの町のたったひとつの自慢の学校」「他自治体住民から選択される学校」を目指す。

という期待される効果等を踏まえ、町の「へそ」に小・中学校を移転集約する方針を固めました。

平成26年6月には、学識経験者、保護者代表、学校評議員、町民代表等19名の委員で構成される「女川町学校施設町民会議」（以下、「町民会議」と記す。）を設置し、女川町小・中学校整備基本計画（以下、「基本計画」と記

す。）の作成や事業手法の検討を、スピード感を持って進めていきました。

「町民会議」では、「整備計画」作成のための次の3つの視点を定めました。

視点1　子供たちを第一に!社会を生き抜く力!

視点2　どの子も安心・安全!

視点3　地域に開かれた、おらほの町の自慢の学校!

そして、どのような学校にしたいかについて、児童生徒や教職員へアンケート調査を行うとともに、ワークショップでの意見、各種要望等を集約して「整備計画」が完成しました。児童生徒のアンケートでは、次のような声が寄せられました。

・小中が仲良く過ごせるような学校。広い学校。
・中学校と小学校が一緒になるので、中学生がいても遊具があったらいいなと思います。
・広いランチルームを作る。
・噴水のある池を作る。
・人も乗れるエレベーターをつける。
・部室を作る。
・グランドは人工芝にする。
・部室を作る。
・校内の仕切りや段差を減らす。等々

時間を要したのは、学校建設資金の財源確保でした。国費である復興交付金を見込みましたが、復興庁との話し合いは平行線を辿ることが多く、調整には2年近くの時間を要しました。町長を先頭に復興庁に出向き、話し合いを行うなどしまして、やっとのことで許可がおり、平成28年10月に復興交付金申請を行いました。そして、同年12月1日に、復興交付金交付可能額通知をいただきました。

また、平成28年10月には、中東のカタール国と「カタールフレンド基金 (QFF)」による移転建設事業の「了解覚書書」を締結することができ、10億円の支援をいただきました。こうして、平成29年5月に基本設計に着手し、平成30年12月に待ちに待った建設工事がスタートしました。建設現場に工事の槌音が響き渡りました時の感激は忘れられません。

建設工事は、関係者の尽力により順調に進められましたが、令和2年に入り新型コロナウイルス感染症による影響が懸念される状況となりました。厳しい状況下ではありましたが、作業員一人一人が感染予防の意識を強く持ち、5月の大型連休中にも、県外から来て建設工事に係っている作業員は帰省自粛するなどして、工事を止めることなく、予定どおり令和2年7月15日に完成を迎えることができました。

その後、非常にタイトな日程の中、完成検査や引越作業を行い、コロナ禍の中で落成式を迎え、待望の施設一体型小中一貫教育学校がスタートしました。

以下は、落成式での女川中学校代表生徒の言葉です。

東に女川湾を望み、緑豊かなこの山に、多くの方々のご尽力のもと、あたらしい校舎が完成しました。この日を、私たちはとても心待ちにしていました。中学3年生にとっては、残りの中学校生活をこのきれいな校舎で過ごせること、すばらしい環境のもと勉強できることを本当に嬉しく思います。

この校舎が完成するまで、たくさんの方々のご支援やご協力をいただきました。カタール国からは多大な寄付をいただきました。また、工事には、全国各地から多くの方が来て、作業してくださいました。そして、町民の皆様に暖かく見守っていただきました。感謝申し上げます。ありがとうございました。私たちがこれからこの校舎で生活するのは、このようなご支援、ご協力があったからこそだという感謝の気持ちを忘れず、校舎を大切にしていこうと思います。…（中略）…私たち中学生103名は、施設一体型小中一貫教育学校の歴史が始まる記念すべき日に立ち会えたことを誇らしく思います。3月には、この校舎から初の卒業生として、堂々と巣立っていけるよう、最高学年らしい生活を心掛け、リーダーとしての役割を皆で果たしていこうと思います。今の気持ちを大切にして、今日から施設一体型小中一貫教育学校の新しい歴史を創っていこうと思います。

落成式～カタール国から児童生徒に記念品～

3. 施設一体型小中一貫教育学校 女川町立女川小・中学校の概要

□　敷地面積　　27,618㎡

建築面積　　5,921.22㎡

□　校舎棟（体育館・共同調理場・共用部む）

RC造一部S造　　4階建て塔屋1階

□　延べ床面積　　13,482.89㎡

東体育館　　1,019.87㎡

屋上プール：ステンレス製　25m　6レーン

小学校低学年用15m

西体育館　　1,264.4㎡

舞台音響装置

校庭　　10,580㎡　人工芝敷設

柔剣道場

□　校内無線LAN完備

太陽光発電装置設備

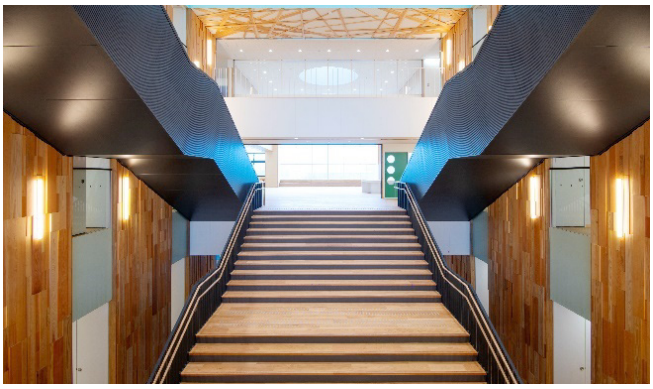
教室、特別教室はエアコン完備

体育館は暖房完備

メディアセンター、図書室、ランチルーム

部室　遊びランド　ビデオトープ

防犯カメラ16台



～　学校の幹　～

建物は小学校と中学校の普通教室を東西のウィングに振り分けて、中央には昇降口から続く大きな階段と吹き抜けを設けています。

特別教室や図書室、体育館やランチルーム等の利用にはこの空間を通ることになりますが、動線が樹木の枝から幹に集まるように、子供たちの出会いや交流を活発にする象徴的な場「学校の幹」と称しています。

この内装壁面は多種多形状の木材約2000ピースのランダムな集合体を樹皮に見立てたイメージとしており、多様な人格や年代の集まりである学校生活を比喩しています。

子供たちの多感な9年間の学校生活に深い記憶として刻まれる、森の中の広場のような心地よい空間となることを願っています。

□　総工費　　53億5,500万円

※その他備品等　　3億4,400万円

（財源）国　費　　36億7,500万円

（復興交付金　震災特交）

カタール国からの支援　　8億6,800万円

原子力発電施設立地地域共生交付金　10億8,000万円

おわりに

東日本大震災発生から10年の歳月が流れました。10年の歳月が長かったのか、短かったのかは、人それぞれ捉え方は異なることと思いますが、間違いなく10年が経過したことは事実です。

女川町は、町独自で作成しました「女川町復興計画」が8年間で終了し、新たなステージに入りました。「3.11」をこれからの10年間、生かされた我々が、自分の心の中にどのように位置付け、生きていくか・・・・その後ろ姿を、震災で尊い命を失われた天国にいる多くの皆様が見守っていることと思います。

町長が、これからの10年間は、これまでの10年間が意義づけられていくという話をされました。真価が問われるのは町も、教育現場も同じであり、これからです。

新校舎や人工芝グランドで毎日嬉々とした表情で学校生活を送っている小学生、中学生だけでなく、新校舎には入ることができなかった多くの子供たちのためにも、教職員、保護者、地域の皆様、そして教育委員会職員が一丸となり、「チーム女川」として、大人も子供も自慢できる、誇れる学校づくりに尽力していきたいと思っています。